

強者の戦略

こんにちは、暑いのか涼しいのかわからない日々が続いていますが、体調の管理だけはしっかりおこなってくださいね。そういえばチリの落盤事故で33人が69日ぶりに救出されました。連日テレビ・新聞など報道されておりますが、タフな人々だなあとちょっとした感動でテレビをみていました。人間結構いろんなことに耐えられるものとおもいます。みなさんもこれから大変な時期がつづきますが、タフでいてください。

さて問題から一週間たちました。何を書くか思い浮かびました？現代史ってついおろそかになってしまっていて、みなさんが生まれるちょっと前までのできごとですが、いつ何があったか意外に把握できていないものです。

以前実際にこの問題が入試にでたとき、研伸館ではきっちり現代史まで講義するので、生徒達は「やったことある」とほっとした様子だったと聞いています。未習範囲がある状態のままで入試に突入するのは絶対にやめましょう。論述問題にしても知識の単答問題にしても、幅広い知識があつてこそです。

さて、問題の解説に入る前に、第二次大戦後の世界の学習の際の簡単なポイントをお話ししておきます。東西対立の時代、いわゆる「冷戦」といわれた時代は、1945年のヤルタ会談やポツダム会談のころからすではじまっており、一応の終結は1989年です。たかだか40年ほどの時代なのに一見すると難しいと思われませんが、「どの時期が対立激化なのか、どの時期が緊張緩和なのか」を掴んでおくとわかりやすくなります。

◎1945ー 冷戦の開始、対立の激化の時代。

米ソ二極とこの二国を中心とする資本主義陣営と社会主義陣営の対立がはじまります。はじめのころは東西両陣営がキャッチボールをするかのごとく、こちらで何かがおこればあちらで組織が出来る、といった状態です。また当初はアメリカだけが核兵器をもっていましたが、ソ連も保有し、イギリスも保有するようになり、核保有をしながらにらみ合う「冷戦」という状態が決定的となります。この時期にインドシナ戦争もあり、朝鮮戦争もあり、ドイツが東西に分かれてしまうのもこの時期です。分断国家もよく論述で問われるところですので、確認しておきましょう。

◎1953ー1959 ころ 緊張緩和の「雪どけ」の時代

1953年にソ連のスターリンが亡くなります。これによってソ連による対米接近がみられ、ジュネーブ四巨頭会談に代表される対話の空気がうまれます。またソ連共産党第20回大会でのスターリン批判や平和共存政策で東側陣営に暴動などの動きがおこり、中ソ対立もはじまっていきます。1959年のキャンプ＝デーヴィッド会談で緊張緩和は頂点に達したかにみられました。しかし両国とも裏ではICBMの開発など軍備拡張が続けられます

◎1960ー62 ころ 再び対立激化、キューバ危機で緊張がMAXに

1960年のU2型機事件以降、一気に緊張が高まり、1961年には冷戦の象徴ともいべきベルリンの壁の建設がスタートします。そして、1962年にはキューバ危機をむかえます。核戦争まで秒読みとまでいわれた時でしたが、ソ連側の譲歩で戦争は回避されます。

強者の戦略

◎1960年代・70年代 米ソ二極の時代から「多極化」へ

アメリカとソ連だけが強かった時期から、さまざまな勢力が台頭してくる時期になります。アメリカはヴェトナム戦争で国際的信用を低下させ、さらにはECの台頭など、日本や西ドイツの発展、フランスの核保有やNATO軍事機構脱退などがあり、ソ連側では東側でも中ソ対立や、東欧の国の中で独自路線を行く国が出てくるなど、東西両陣営の中で様々なほころびが見え始めました。また、第三勢力がのびてくるのもこの時代です。

◎ 1985～1989 ゴルバチョフ登場、そして冷戦終結へ

ソ連のゴルバチョフ書記長が登場してから、再び協調路線へ舵がきられます。新思考外交・ペレストロイカ・グラスノスチを掲げた彼は、今までの内政・外政を大きく転換させます。一方アメリカも軍備拡張による赤字などもあり、米ソが歩み寄って緊張は徐々に緩和されていきます

1987年にはINF全廃条約ではじめて核が削減され、1989年の11月にはベルリンの壁が崩壊、12月にはマルタ会談によって冷戦が終結します。

ざっとまとめるとこんな感じです。この時期は緊張か協調路線か、そういうことがわかれば意外に簡単に論述問題でも書くことがつかめるはずです。

《解説》

さてそれでは問題の解説です。実際に京大スパルタンで使用した画面をだしてみますので、内容を確認してくださいね。

第二次世界大戦後の世界は、アメリカ合衆国とソヴィエト社会主義共和国連邦(ソ連)がそれぞれ資本主義圏と社会主義圏の盟主として激しく対立する、いわゆる二極時代で幕が開いた。だが1950年代半ばになると二極構造に変化がきざし、1960年代以降、その変化は本格的なものになった。1960年代に世界各地で起きた多極化の諸相を、300字以内で具体的に説明せよ。

戦後は…二極

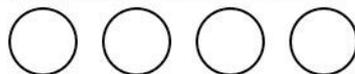
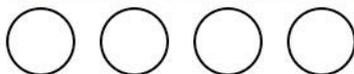
アメリカ中心の
西側陣営

ソ連中心の
東側陣営

1960年代以降

アメリカ中心の西側陣営

ソ連中心の東側陣営



第三世界

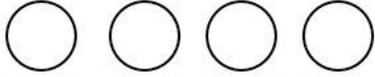
まず「多極化」ですので以上のようなイメージをつかんでみてください。

強者の戦略

そして細かく出来事を書いてみます。

1960年代以降

アメリカ中心の西側陣営

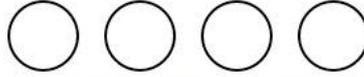


アメリカ：国際的威信低下
(ヴェトナム戦争など)

フランス：独自路線
核保有
NATO軍事機構脱退

EC成立

ソ連中心の東側陣営



チェコスロヴァキア自由化
“プラハの春”

ルーマニア・アルバニアの独自路線

ユーゴ：非同盟諸国首脳会議

中華人民共和国(核保有)とソ連
の対立

部分的核実験停止条約(フランス・中国調印せず)

第三世界

非同盟諸国首脳会議

60年「アフリカの年」→アフリカ統一機構
産油国(OPECなど)の発言力強化

先述のまとめにもあるように、「多極化」ですから、西側・東側それぞれが決して一枚岩ではないということ
をまずはしっかり思い浮かべてください。

つい忘れてしまうのが、核の保有に関することです。それまでは米・英・ソだけが保有していましたが、部
分的核実験停止条約に仏・中が調印しなかったことをみても、仏・中が核を持ち、発言力を強めようとして
いることがわかります。

そして受験生がうっかりしてしまうのが、第三勢力(第三世界)の動き。アフリカは1960年に多く独立し、ア
フリカの国連とまでいわれたアフリカ統一機構(OAU)が成立します(現在はAU)。また石油が重要なエネ
ルギーであることから、産油国の発言力が強まっていくのもこのころです。

《解答例》

西側ではアメリカがヴェトナム戦争で国際的威信を低下させ、フランスのドゴール政権は対米依存からの
脱却を目指し、核を保有、NATOの軍事機構から脱退するなどの独自路線を展開し、また西欧はECを成立さ
せて統合を進めた。東側では“プラハの春”といわれたチェコスロヴァキアで自由化の動きがおこり、ルー
マニアやアルバニアも独自外交を展開、ユーゴスラヴィアでは非同盟諸国首脳会議が開催され第三世界の結
束が見られた。中国ではキューバ危機以降ソ連との中ソ論争が本格化、69年には国境紛争にまで激化し、ま
た米ソ主導の部分的核実験停止条約にはフランスと共に調印しなかった。アフリカではOAU(アフリカ統一機
構)が成立、産油国のOPECと共に国際政治への影響力を強めていった。(300字)

チーム・スパルタン 北林久忠